

タイの地震

大友 篤

環境決定論者では決してないが、特定の地域の自然環境が、その地域に長い間住んでいる人びとの行動や思考に大なり小なりの影響を与えることは否めないようである。

かって、国連職員としてタイのバンコクに在勤していた時のことである。たしか1974年の、日本でいえば秋ごろであったと思う。タイは季節変化が少ないので、判然とは記憶していない。正午に近い時刻であったと思う。何か建物が揺れたような感じがした。私のオフィスは個室だったので、何となく日本にいる感じで、その揺れをそれ以上には意識せず、そのまま仕事をつづけていた。突然、廊下がさわがしくなり、大ぜいの人びとが駆け抜けていく様子だった。その時、ノックがして、同僚で日本人のI氏が“今のは地震ではないですか”と言いながら入って来た。

私は、“タイには地震はないはずですがね？”と行って、彼に椅子をすすめた。その時、何気なく2人の視線があい、われわれ2人は、同時にあることに気がついたのであった。突然、2人は、あわてて部屋をとび出し、すでに事務所の建物の前庭に出ていた大ぜいの外国人職員たちのグループに加わった。われわれは、建物を出た最後の職員であった。

すでに前庭にとび出していた職員たちは、みな顔面そう白で、不安な顔つきであった。われわれは、“あの程度の揺れは、日本では地震のうちにも入らない”と彼らに話しかけながら、“タイには地震がないはずだから、どこかで爆発でもあったのではないのかな”などと、30分ほど、その場に立ちつくしていた。しかし、その後は、再度の揺れもなく、われわれ以外は、みな落着かない

様子で、仕事にもどって行った。

オフィスで再び仕事をしようと、机の上の書類に向ったら、私の秘書が入ってきて、先ほどの地震の原因が不明なので、全員帰宅するようにとの命令が本部から出たことを告げた。私は、大した地震でもないのにと思いながらも、帰宅の途に着いた。

車で帰宅の途中、私の職場だけでなく、バンコク市内の職場や学校のほとんどが同様の措置をとったことを知った。それは、交通が大混乱をはじめていたからだった。通常の通勤時間の3倍以上の時間をかけて、家にたどり着いたら、私の2人の子ども達は、平然とプールで泳いでいた。私の顔をみるなり、“どうして今日は早いのか”と問いかけてきた。今日は、地震があったのを知らなかったかと言うと、2人とも、日本人学校で何か少し揺れたような気がしたけれども、だれもさわがなかったし、学校もいつもの時間通りに終わり、帰宅したのだということであった。

地震国日本で育った日本人たちにとっては、全くとるに足りない程度のものであったのだ。翌日の現地の新聞は、“90年ぶりの大地震”という見出しを掲げ、震源地は、アンダマン海溝であることを報じていた。日本人にとっては、微震であっても、タイの人たちにとっては大地震なのであった。

ところで、揺れの後、I氏と2人で、遅ればせながら、あわてて建物をとび出した理由は、タイの建物は日本のように耐震構造ではないことに気づいたからであった。後になってから、あれが微震ではなく、もっと激しいものだったらと思いかえすと、背筋が寒くなるのをおぼえた。

(宇都宮大学)